

東京芸術座 蟹工船

言わせて! 今日芝居

五十字劇評 No.25

今回の『蟹工船』は、がっちり心に迫る圧倒的な凄さがある。見て良かった。(男性)

▼真に迫る素晴らしい演技でした。二度とあの戦争に突き進む暗黒時代に戻してはいけなく強く思いました。(男性)

▼今にもつながる話でした。重たい話ではありませんが、要求内容の雑夫にアメというのがかわいい感じでした。(女性)

▼正に迫真の演技だった。名作だがノンフィクションとして捉えれば、現代でも未解決の問題である。今回の劇は、真剣に作者の世界を凝縮して表現されており、船内労働者を今の自分に置き換えて考えさせられる内容だった。最期の男達のソーラン節が切なく胸に突き刺さる。(男性)

▼ソーラン節の力強い歌声が心に響いた。漁師達の心の叫びが伝わってくるような、そんな大合唱に心が震えた。(女性)

▼蕪壺という名に、泣ける。ただ息を食べるのみ。楽な暮らし。楽しい生活。「人間らしさ」とはー。考える。(女性)

▼ビーズの荒々しい波しぶき、大揺れの長い鉄材の水平線、稽古を重ねた乗組員達が転がる横揺れ。臨場感溢れる舞台は、創意工夫と舞台にかける情熱の賜物と知りました。(男性)

▼久しぶりに、観ごたえのあつた芝居です。内容は、現代にも当てはまるもので、何年たっても弱い者はそのまま。(男性)

▼見る前、暗いし重たいし気乗りしなかったが歴史の負の遺産も知っておかなくてはと、義務感で出かけた。最後まで眠くならずしつかりと見た。面白いとは違う演劇の醍醐味。これぞ演劇って感じ。(女性)

▼幕あきの音楽・ナレーションのトーンを聞いて、一〇代のころを思い出してました。舞台すべてが博光丸の船、荒海の様子の表現などすばらしい舞台でした。公会堂の舞台の広さだから、船内の様子がよくわかった気がしましたが、白夜でしたら舞

台がもう少し明るくても良かったのでは。俳優さんの声が少し聞きづらかったのが残念でした。特に、会社員の押し殺した声。(女性)

▼まさに社会の縮図を見た。昔も今も搾取の構造は変わらない。労働者もこの構造に疑問を持たない。(男性)

▼世の中、悲しいこと恐ろしい事など悲惨な事だらけだから、笑いが欲しいのが正直な気持ち。でもいい劇だった。(女性)

▼命よりも大切なものはない。それは労働者が団結して守るしかない。それを改めて教えられた。だが電通事件は…。(男性)





▼他に逃げ場の無い極限状況の中で、搾取・抑圧する側される側がとてもしンプルに描かれており、考えさせられる所が多々あった。三三人もの役者が演じる群像劇はとて迫力があつた。過酷な労働実態は現在も変わることもなく、劇団の財産演目であるこの作品を、今やることの意味があると思う。(男性)

▼最初から最後まで気のぬけない芝居でした。ハラハラドキドキ！啞・船大工等みんな力を合わせて！つらかつたが、元氣もりました。(女性)

▼船が苦手な私は、後半船酔い気味に。それ程ダイナミックな舞台・演技に圧倒された。一人の力を大勢の力にする。そこが今の社会では難しくなっていると感じる。でもあきらめずに行けることをと。(女性)

▼群像劇は初めて。少々の戸惑いはあつたが、問いかけてられていることは鋭く本質的なもの。資本主義社会(現在)において、資本家と労働者は

対立せざるを得ない。資本家の利潤は、労働者を搾取することによってしか

生まれえない。搾取の方法がより巧妙になり見えづらくなっている。人間らしく生きたいという、当たり前のことを諦めないために必要なことは。その原点をこの演劇は示している。(男性)

【七〇代】

▼多喜二虐殺から八四年。時の支配権力が一貫して国民への分断攻撃を行い自らの富を守る姿を鋭くついた作品だ。(男性)

▼腹の底からの発声(時には台詞が聞き取れず)は、舞台にかける気合いが伝わる。荒れ狂う北の海・冷たい

い波しぶき・のみとしらみ、虐待と酷使に苦しむ漁夫・雑夫たち！要求をつきつけるその姿に私たちの今を重ねる。(女性)

▼いい時代になりました。昭和のはじめにこんなつらくて悲しい話があつたのですね。でも人々の団結力ですこいですね、すばらしかつたですよ、なみだがいっばいでした。(女性)

▼労働基準法の歴史的重さを胸に刻まれる思いだった。目を塞ぎたくなる残酷・悲惨を記録した先人と演劇人に敬意を表する。(女性)

▼大きな劇団の力強さを堪能しました。出演者だけでなく、音響、舞台演出関係者の蟹工船にかける思いがびんびんひびいてきました。(女性)

▼舞台装置とソーラン節がすばらしい。戦前の貧しい人々の苦悩が胸にひびいた。良い芝居でした。(女性)
▼こんな大勢の登場は初めて。みんな貧しいだろうなあ。頭割りすると一人分の出演料が少なそう。「蟹工船」

の時代と現代と、そう変わつてない若い人の仕事の過酷さがあるように

思う。(女性)

▼今年五回目で、初めて開演前に幕が下りていて良かった。舞台を見ながら、作者小林多喜二の無念さと、

演出の村山知義の同時代のやり切れなさを思い辛かつた。舞台装置、音響、照明、演出、三〇人を超えるキャストの力演！時代を超えて繰り返し上演されるに値する舞台だと思えます。人間として生まれて、差別のない社会とやらは、果たして来るのやらと思ひ、暗たんたる気持ちも舞台を見つつ感じました。(男性)

【八〇代】

▼終戦後の第一回目の蟹工船に船員として乗船し、労働者が金銭で売買された現場を実際に見ていたので芝居での臨場感が伝わってきました。(男性)

【年代性別不明】

▼貧富の差の大きい現在、働くものが繋がる大切さを多喜二によって再認識しました。ソーラン節の力強さもびつたり。

編纂スタッフから

市民劇場だからこそ観ることができた芝居であり、感想と痛感しました。